

た。時計や万年筆は取られたが他の物は取られません  
でした。中隊も皆一緒でした。幸いに体の調子は部隊  
員も悪い人はなく、全員帰国できることとなりました。

昭和二十一年二月二十四日、上海飯田棧橋からLS  
Tで、揚子江河口で一晩停泊して出航、二十八日佐世  
保に上陸、復員しました。DDTをかけられ、海兵団  
の跡地へ集まり、故郷が遠い所の者から汽車に乗って  
帰り、長崎の者は最後でした。持参して来た米は中国  
の蘇州米（日本米と同じ軟質米）で、この米を持参し  
て帰宅しました。

切符をもらいましたが長崎は私一人でした。部隊は  
全国の寄せ集めでした。補充兵や召集兵が多く、現役  
の私が一番若かったのです。帰宅すると家族は皆元氣  
でした。兄弟三人、長兄は海軍の補充兵で揚子江河口  
付近の舟山列島にいて、私より後に帰ってきましたが、  
次兄は三菱造船にいて内地だったので無事で、父母も  
元氣でした。

私は三年間初年兵で勤務し、満州と中支にいました  
が幸い生還できました。満州から南方へ転属して玉碎

した人もおり、終戦後、シベリアへ抑留された人もお  
りました。戦友は他県の者ばかりで、一緒に入営した  
者とはたまには会えますが、戦友会はなく寂しい限り  
です。苦勞の三年間でしたが生還でき、兄弟三人共生  
きていたことは父母にとっても幸いであつたと思いま  
す。

### 歩兵第八十五連隊

#### 湘桂・明号作戦参加

福島県 七海 寅松

昭和十七年徴集兵の私は福島県郡山市で農家の三男  
として大正十一年一月二十日に生まれ、昭和十七年十  
二月二十日現役兵として、歩兵第二十九連隊の留守隊  
に入営しました。

中支の第二十二師団歩兵第八十五連隊へ転属を命ぜ  
られ、翌昭和十八年一月九日、下関を出航し、現地で  
三カ月間歩兵としての訓練を受けました。一期の検閲

を終えると連隊本部に勤務し、被服係を命ぜられました。それは家が農業でも私は三男でしたので、洋服の仕立見習の修業をし、年季明けして兵隊に入ったわけ、その入営前の職業を生かしての被服係であったのかと思いました。

三カ月間、本部で勤務をしていましたが、連隊は移動するので私は中隊復帰を命ぜられました。何の目的でどこへ行くのか、直接は聞かされないまま、上海から乗船して、台湾の高雄港へ、他の連隊の船で途中、潜水艦の雷撃で沈没したものであり、相当の損害を受けたと後に聞きました。

南支那の広東に上陸して、中山<sup>ちゅうざん</sup>大学に仮駐留、各連隊の集結を待ち、湘桂作戦参加を知りました。私は第二天隊機関銃隊大隊砲隊に編入されました。大隊砲は駄載で、砲身、砲架、車輪を馬の背に積み、砲弾は三発あて箱に入れて積むのです。広東省の新会県から行動を起こしましたが、ほとんどが山で、梧州付近から広西省に入ったのですが、我々兵隊には当時どこへ行って何をやっているのか分かりませんでした。

行動中は広東の中山大学にいるときから空襲があり、広西省境の梧州付近からはだんだんと激しくなってきました。

山の陰から不意にP51戦闘機が現れて行軍中の部隊を銃爆撃します。馬部隊は馬を隠すのに随分苦勞したものです。西江沿いに進む我が師団は、敵を圧迫しつつ西へ西へと進撃し、在支米空軍基地を攻略するのですから蒋介石軍も必死に抵抗します。特にこれを支援するというより、支那軍は米軍の指揮や指示のもとに抗戦していたと聞きました。広東、広西省には甘蔗(砂糖きび)が多く、敵もそこに隠れて我が軍を向かえ撃つ。迫撃砲や、水冷式重機関銃やチェッコ軽機などで撃ってきて、我々は空と陸とから射撃を受けるのです。空襲の銃爆撃で機関砲がやられたので、機関銃で対空射撃をしていたら、今度は我々が逆に敵討ちをされました。

我々第二機関銃隊が移動中のとき、嫌な予感がしていたら空から銃撃されました。馬は松の下に遮蔽していましたが、隠しきれずに撃たれ、機関銃もやられ、

だんだん損害も増してきました。

十月の下旬になると支那軍は我が軍に反攻してきましたが、西江を西へ進む日本軍に支那は敗退を重ねていて、ただ空襲でわが進撃を防いでいたようでした。

後に聞いたことですが、雷州半島の方から敵を包囲するように東方に向かった独立混成第二十三旅団は、貴州・潯州付近を攻略していましたが、支那軍は奥地からこの部隊に対して包囲反撃してきたといえます。

私たちの歩兵第八十五連隊は急遽応援のため桂平（潯州）へと攻撃を開始し大激戦になったのです。

昭和十九年十月二十七日に連隊は、西江の上流の鬱江を渡河し敵を撃破したのですが相当の犠牲を出しました。広西省に入ると岩山が筍のように立っていて南面の風景でした。広西省は広西モンロー主義といって蒋介石軍とは違った軍隊で、他の省の者も自分の省に入ると攻撃するという排他性が強く、岩山の洞窟は食糧を貯蔵し、そこを拠点として防衛しています。南寧付近では大隊副官が他の所で住民の土民軍にやられました。岩山の中から煙が出ているので、そこを攻撃し

たらトーチカのようになっていて反撃してきます。また他の山の方の銃眼からも撃ってきました。大隊砲で撃ったのですが岩山で駄目でした。山砲や野砲で直撃しないと無理です。大隊砲は砲身が短く、八百メートルくらいしか効力がないのです。

第二大隊は潯州の敵を撃退してから、大隊副官が撃たれた南寧に向かったのですが、その間は岩山の聳える間の平地を進み、石竜坪、貴州、賓陽、南寧へと進むのです。しかし両側の岩山のトーチカから撃ってきます。正規軍ばかりではなく広西の土民軍も。遮蔽するものもないし、こちらが攻撃すれば岩山の洞窟に隠れる。岩山は大隊砲では破壊できない。始末に負えない敵を追いながら南寧に入ったのです。

十一月には湘桂作戦も大詰めを迎え、日本軍は桂林、柳州を攻略し、飛行場を占領し、重慶軍を貴州省へと追いあげていました。我々の第二十二師団は、冬兵団（北支から南下し、この作戦に参加した第三十七師団）と共に中国大陸を縦・横断して仏印へ入るよう命ぜられたといえます。この両師団が仏領印度支那へ入れば

支那派遣軍が南方軍と手を結ぶことになり、文字通り大陸を打通したことになるのです。

我が師団は、昭和二十年二月十八日、先に仏印に入った第三十七師団に続いて、広西省の鎮南関を越えて仏領印度支那（今のベトナム）に入ったのでした。歩兵砲隊はその間、中隊の援護に任じて、駐屯をしながら休むということはほとんどありませんでした。

仏印に入ってから、二月十六日に国境を通過したのですが、仏印は占領地でないのです。依然としてフランス領（仏印、フランスの植民地）なのです。木一本も勝手に切ってはいけません。糧秣は軍の補給以外は取ってはいけません。従って、食料は乏しく、毎日お粥だけで訓練、ハノイ攻撃の演習をしなければならぬにはまいりました。これにひきかえフランス軍はぜひいたく暮らしをしていました。

日本軍は南方においてだんだんと撤退（ビルマなどでも）してきたし、欧州でもイタリアに次いでドイツも降伏し日本一國だけが世界の連合軍と戦っているのです。フランスはドゴール軍が権力を持ち、その時

の仏印も日本の言うことをきかなくなり、陰では反抗してきました。そのために次に申します「明号作戦」を発起し、我が第二十二師団は、仏印駐屯の第二十一師団（討兵団）と共に作戦行動をするのです。

思えば、中支軍として駐地を出発、上海からの海路移動は敵潜水艦の雷撃と空襲を避けながらの薄氷を踏む思いの連続で、他の連隊の一個大隊は海没し、数百の兵が戦没しました。もしあの船に乗り、あの日時にあの付近を航行したら私たちの現在もありません。

南支の第二十三軍の隷下になって湘桂作戦に出発したのが新会県城で九月九日、秘匿名「ト号作戦」の後でありました。

広西省に入ってから、馬と共にの大隊砲小隊の行く手は悪路と山路との連続で、九月とは申せ炎暑の南支那ですから、マラリア、赤痢に悩まされながら強行軍の連続です。四〇度の高熱と悪寒、一時間に何回かの排便、粘血便に体力は衰える。この苦しみは体験者でないとは分かりません。

毎日のようなP51の銃撃と広西軍の岩山からの攻撃

で多数の上官や戦友が戦傷、戦死をしましたが、約八カ月半の作戦行動の末、私も生きて大陸打通の任務を全うすることができました。今度は南方軍隷下に入ろうとは、上海を出発するときは考えてもみませんでした。

仏印での作戦行動は約六カ月でしたが、その後、日仏戦争といえる「明号作戦」は、仏軍にさとられないよう、秘密裡に周到な準備をし、一挙に戦闘を開始、一挙に降伏させたというものです。現地人は、これによりフランスの植民地から独立をすることができるようになったわけです。

八月十五日、終戦により、仏印の情勢はまた変わり、勝った日本軍が武装解除され、山の木を伐採したりフランス人の住宅建設や土木作業などの使役に出される。管轄は英軍なので報復のためか厳しい。欠礼をするとかましく注意をうけるが敗戦した方なので我慢するより仕方ありません。食料は現地米で（硬質米）、副食は十分でなく、我々は街で私物と果実や副食物と交換していました。

住民とのトラブルはあまりありませんでした。しかし、日本軍は負けたと知っているから、占領中のようにはいきませんでした。南支の時と同様にマラリアで四〇度の高熱と悪寒の連続で作業もできなくなる。このマラリア病には、内地に帰ってから三年間くらい悩まされました。キニーネ（特效薬）は若干もらって帰りましたが、雪を取ってきて冷したりしました。消化器病や、伝染病にはなりませんでしたが、軍隊では七〇キロあった体重が帰るときは五〇キロになってしまいました。

抑留中にはベトナム人の独立運動が盛んになり、現地人はフランス人を倒して独立したいから、日本軍の武器をもらいたく、また独立に日本軍が味方をしてくれないかと、日本人に対してはフランス人より親近感を持っていたようでした。しかし、フランス軍は日本人を独立軍の鎮圧に利用したこともありました。

帰国命令が出たのは、昭和二十一年五月になってからで、二十六日にバンコク出航、六月五日神奈川県浦賀に着きましたが、コレラ患者が出て、停泊させられ

ましたが、ようやく上陸が許可となり、頭からDDTを散布され、一人三百五十円をもらって故郷へ帰ることになりました。

我々の部隊の十七年〜十九年ごろまでの兵隊は福島県が多く（それ以外は群馬県）、いわゆる郷土部隊でしたから、郡山、会津若松、福島と仲間は一緒になって乗車して復員しました。

私の家は、両親も健在、二人の兄も復員していました。農家ですから都会と違って食料は何とかありました。一年後に郡山へ出て来て、前職の洋服縫いをはじめ、それから四十年間続け現在に至っています。マリアの後遺症もありましたが、四十三歳の時に三年間も腎臓を患い、糖がでて、食事療法によって肥らぬよう（七五キロを六二キロ）にし、現在は体調がいい。戦友会は三方面に分かれており、私たちは毎年のように戦友会を開いて交遊を続けています。

## 常德作戦の苦しみと

### 玉砕した戦友を想う

静岡県 鈴 木 惣太郎

私が静岡県賀茂郡の稲取町で、沿岸漁業を業とする家の長男として生まれたのは、大正十年三月五日でありました。学校を卒業し軍隊に行くまでは父を助け漁業に従事していましたが、昭和十六年兵としての兵隊検査は四月に行われ甲種合格であり、昭和十七年四月十日、中部第三部隊（静岡の歩兵第三十四連隊の留守隊）に入営しました。

内地で一期の検閲を受けるまでの三カ月間は地獄のような教育でした。その後、大部分の戦友は十二月に、第三十八師団（沼兵团）でガダルカナル島へ行き、ほとんど戦死しました。そのうち一人だけが、十八年三月、ガ島生き残りとして生きて帰り、今でも時々会っています。